

釜石湾口防波堤の被災状況



防潮堤が完全に倒壊



TEはホテルお相部屋で、休日は自炊で凌ぎながら業務



復興支援一釜石港より

平成23年5月25日記

沖縄支部（復興支援室併任）

テクニカルエキスパート嶺井孝泉

4月23日、前日の復興支援業務ガイダンスを経て、早朝より仙台から岩手へ出発。「これからいよいよ始まる」との想いから、早朝の寒さも手伝って身震いをしたのを今でも覚えています。内陸部を走っている限りでは、震災の影響をさほど感じることはありませんでしたが、沿岸部へさしかかると、激甚災害の爪痕を目の当たりにしました。連日テレビ等のメディアで報道される映像をみて、心の準備はできていた筈でしたが、思わず絶句してしまい、津波のもたらした凄まじいエネルギーを感じずにはいられませんでした。

週が明け、釜石港湾事務所へ着任。復興支援業務の具体的な内容は、災害査定資料作成、並行して原形復旧概算額の算出といったところですが、現地調査結果が揃わないこともあり、担当職員より具体的な指示もなく、なかなか本格的な業務開始とはいきませんでした。

現段階でできることはないか？ SCOPEの技術者として何をすべきか？

いろいろと模索し、津波で浸水した執務室で、今後必要となるであろう資料の整理、電子データがない既往案件のCAD図の作成等を行い、結果として後々の作業に反映させることができたと自負しております。

本業務では、限られた時間の中でいかに効率的に業務を遂行できるかが重要となります。そのためには、発注者に対して、受け身ではなく常に積極的なアプローチを行う姿勢を保ち、相互協力のもとで業務を行っていきたいと考えております。

一方、被災地の学校では、満足に給食を用意することができずに、午前中で授業を終えることもあるということを聞き、胸が詰まる思いがしました。これまで見てきた被災地の現状や被災者の生活環境を考えた場合、一日も早く復興が進むように尽力したいと考えています。

災害復興支援業務に携わって～釜石港より

平成 23 年 10 月記

沖縄支部（震災復興支援室併任）

テクニカルエキスパート 伊禮貞治

今回の地震は広範囲にわたって甚大な被害をもたらしました。また、追い打ちをかけるように、福島原発事故が地震で助かった人たちから全てを奪ってしまった現状はあまりにひどいものです。

阪神大震災の際には SCOPE からも復興支援に技術者を派遣したという話を聞いていたので、今回も派遣することになるだろうと思っていました。そして、この震災の復興に関わりたいと思っていましたので、復興支援のお話を頂いたときには即決しました。5 月 3 日に釜石に入りし、担当する大船渡港や釜石港を事前に見て回りました。震災から一月以上経過しており、ニュースではいやと言うほど悲惨な状況を見ていましたが、実際に見る現状は信じられないものでした。主要道路だけは、がれきが移動されて、かろうじて通行ができる状態でしたが、家も崩れたまま、車も壊れたまま、道路には自衛隊の車両が溢れ、そこかしこで作業をし、各県から集まったパトカーが列をなして走り回る様は異様でした。港湾施設の被害も大きく、大船渡港と釜石港の湾口防波堤は壊滅的でした。大型の防潮堤がいたるところで倒壊し、被害範囲の広さに呆然となりました。岸壁は、地震の影響で 80cm 程地盤沈下をしていますが暫定供用しており、支援物資の搬入などに使用されていました。

私たち沖縄部隊は釜石港湾事務所で釜石湾口防波堤と大船渡港湾口防波堤、大船渡地区の野々田岸壁、永浜岸壁の災害査定資料作りでした。現況復旧を基本とし、発注当時の資料を参考に資料を作成するのですが、まずは津波で流されて積み上げられている報告書の片付けと対象書類を探すことから始めました。流されて紛失している資料も多く、古い時期の構造物では電子データなどもないことから、標準的な図面は自分達で作成しました。

釜石での宿泊は高台にある大きなホテルでした。津波被害を受けなかった数少ない宿泊施設であったため、日本赤十字や警察、電気工事関係者など復興支援の基地のようになっており、大変賑やかな状態で 100 人以上いたと思います。和室大広間には一面蒲団が敷き詰められて、まるで修学旅行のようでした。

ホテル側は、規模に合わない大量の宿泊客に対応が間に合わなかったのと、震災直後で食材が豊富とは言えない環境でしたので、揚げ物や焼き物、煮物がいつも冷たい状態で並んでいました。幸い津波の被害から免れた地域には大型スーパーもあり、野菜や肉、刺身なども買えたので、休日の食事は楽しみの一つでした。また、3 人相部屋での生活でしたので、朝から晩まで、そして休日も、おじさん 3 人で力を合わせ 4 カ月間生活したことも大きな経験と言えます。

残念なことに、今回私たちが引き揚げる 9 月末時点では未だ解体作業が行われ、がれきの山がどんどん高く積まれていく状況です。それでも道路脇に散乱していた建物や車を取り除かれ更地が増えてきて、建築工事を行っているところも見受けられるようになりました。時間はかかるでしょうが、それでも確実に復興できると信じています。

災害復旧事業支援活動について報告～釜石港

平成24年11月記

仙台支部

テクニカルエキスパート 大山 典夫

◆変わらぬ被災風景

4月から山手にある仮設の釜石港湾事務所に徒歩通勤している時は、津波被害の復旧した場所を通るのでさほど感じませんでしたが、7月に津波被害の修復が終わった海側にある旧事務所迄の道路を歩くと、二階部分まで鉄骨がむきだしの店舗、合板で入り口、窓を塞がれた公共施設、上物がない基礎が残ったままの居住区跡など、津波被害の大きさを痛感する風景が残っています。私は帰省の為、たまに国道45号線を車で北上して帰るのですが、釜石の北部から宮古にかけて道路沿いには建物の基礎だけの風景が未だ残ったままです。大津波から1年8ヶ月、復興するには様々な規制等があるようですが、復旧が終わった、新しい風景を早く見たいものです。

◆作業環境の改善

仮設の事務所では会議用テーブルに2人掛けで、パソコンを置く以外さほどスペースが無く、後を通る人がいれば椅子を引くという不自由な環境でした。（夕方になると照明も暗く若者達？には特に辛い）

7月に修復が終わった旧事務所庁舎の書庫という名の執務室に引越してからは、1人で1台の会議テーブル（引出が無いのが難点）を独占し、快適に作業しています。

◆チーム釜石

釜石港では個性豊かな面々の総勢6名（施工現場担当：高瀬、田中、設計図書等担当：久慈港・松澤、宮古港・三平、釜石港・大山、大船渡・千菅）で作業しています。内業チームは担当港が決められているものの、各港の作業量・納期等の関係もあり、合同で作成することが多々あります。私は疑問点があれば『人の迷惑顧みず』であるチーム釜石内のモットーを忠実に守り、相手には忙しくても中断してもらい、自分優先で疑問等を解消し作業しています。昨年、相馬港で災害復旧事業支援活動を1人で作業してる期間にギブアップ寸前までいったことを思うと雲泥の差です。

設計図書・資料作成は発注者との認識のズレから意向通りいかない事も多くあり、周りに相談できる相手がいるというは大変心強い事だと思います。これから残り約4ヶ月アパートの名前（釜石絆住宅：仮設プレハブではありません）にある「絆」の一文字を大切にチーム釜石として作業したいと思います。

◆書庫（入口のプレート）という名の庁舎内執務室にて



左奥 田中氏

左中 高瀬氏

左手前 大山（筆者）

右奥 三平氏

右中 千菅氏

右手前 松澤氏